

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ビラやき

【作者名】

広田尚樹

【あらすじ】

冴えない勤め人・俊明くんの元に、転がり込んできた女の子・アイ。この女の子、実はカメラの魂だったのです。

『+にじうら+』文字板に投稿したものを、一部手直しし投稿させていただきます。

ざるやめ

「ただいま～」

「あ、俊明さんお帰り～ すぐご飯にする？ それともお風呂？」

「その前に、はい、これ」

嬉々とした表情で出迎えるアイに、俊明は手提げの紙袋を渡した。それは濃紺に白抜きで波と千鳥の模様があしらわれたもので、右下には有名な和菓子屋の名前が入っている。

アイがきょとんとした。

「俊明さん、これ何？」

「あ、えっと……ざるやめ」

「ざるやめ？」

「うん。駅のコンコースで売つててね。色々とアイには写真の事で助けてもらつてるからさ。そのお礼」

少しだけアイの表情が曇つた事に、俊明は全く気付かなかつた。

「あ、ありがと。明日は雨かな？」

アイは微かに笑つと、殊更明るい口調で俊明の事をからかつた。俊明がアイに何かを買つてくるのは今に始まつた事ではないが、今までに買つて来たのは単二アルカリ電池か2CR5リチウム電池ばかりだ。食べ物、それもお菓子を買つてきたのは初めてである。

「慣れない事をすると、あとでエライ田を見ることになるかもよ？」

「……ア～イ～？」

俊明はアイの頭をはたこうと左手を振り下ろした。もちろん力は加減している。

アイはそれを軽くいなし、逆に俊明の左手を両手で握つて言った。

「ほらほら、早く上がつて。今日の晩御飯はジャガイモといつぱいの力レーだよ」

「それは嬉しいけど、ざるやめとかと言つと、先に風呂入りたいんだけど」「そんなのあとあと。あ、そうそう。大き田の寸胴で作つたから、ノルマは十杯ね」

「ビールで買つてきたんだよ、そんなの!?

アイの背中とこりかお尻の辺りから、黒くて先の尖った尻尾がチラと見え隠れしているように俊明は感じた。

それから十五分後。

「……でさあ、アイ

「ん? なあ?」

カレーを黙々と食べる俊明の対面。一コ一コと笑いながらその様子を見つめるアイにて、俊明は質問をぶつける事にした。

「本当に十杯がノルマなのか?」

「やだなあ、『冗談だよ、ジーラーダン』あ、ほら、お皿が空っぽだよ?」
しゃもじを手に「ほらほら、わあわあ」と言しながら、アイはもう一方の手を俊明に向かつて差し出した。皿をよこせと言つ事らしい。

(「冗談は真面目に書つかない」と面白い、と言つたのは誰だつたつけ)
俊明はアイを見ながらそんな事を考えずにはいられなかつた。そして、間違いなく十杯ノルマは本氣だ、と思つた。
「ほらほら、まだこんなにたーんとあるよ。」
「見せいでいいから」

観念して皿を差し出す俊明を見て、アイは嬉しそうに笑つた。

「なんだかんだ言つて、ちやんとお代わりしてくれるんだ」

「ジャガイモたっぷりのカレーは田保ちしないから、早めに片付けちゃわないともつたといいだろ?」

「……ちょっと作りすぎた、かな?」

アイの引きつり笑いを見て、俊明は数年前の出来事を思い出した。
それはアイが俊明の元に来る以前の事だ。

北海道の知り合いから送られてきた十キロのジャガイモをふんだんに使って、俊明はカレーを作つた。作つたは良いのだが作りすぎてしまい、結局腐らせてしまつたのである。

腐らせただけならまだ良い。少し味が変だと思いつつ無理して食べた結果、激しい腹痛と下痢で三日間、布団とトイレとを往復すると

「いや、なんともアレな黒歴史まで創る羽目になってしまったのだ。

俊明はそんな苦い思い出を頭の片隅に追いやると、話を替えた。

「それにしておき、アイって僕が食事しているところを、ホント嬉しそうに見てるよね」

「そりゃそりゃだよ。ボクが作ったお料理を、美味しいように食べててくれるんだもん。何ていうか、『料理人冥利に助かる』ってやつだね」

アイは頬を赤くしながら笑った。

実際、アイが作った料理は美味しいと俊明は思つ。思つけど……。少しだけ神妙な面持ちで俊明はアイを見た。

「アイは食べないのか？」

俊明の言葉に、アイの表情が一瞬強張つた。

「ボクは、電池が主食だから」

「まあ、それはそうだろうけど」

「それに、作つてる間にお味見してると、それだけでお腹一杯になつちやうんだ」

「……そつ」

敢えて俊明はそれ以上の追求を避けた。

「『まつまつ』。ノルマ達成まであと四杯。ファイト、だよ？」

そう言つて笑うアイの笑顔は、どこか寂しさを感じさせめる笑みだつた。

「」

「『』、『』」

「はい、お粗末さまでした。本当に十杯食べるとは思わなかつたよ、感心感心」

「……まさかわん」そば紛いのイベントを開催されるとは思わなかつたよ」

イヤなら途中でカレー皿を伏せれば良さそうなものだが。

言つた後でそれと気付いた俊明は、アイから同様の指摘をされる前に、そそくさと風呂場へと姿を消した。

その様子をクスクス笑いながら見送ると、アイは傍らにある濃紺の紙袋から中身を取り出した。縦横それぞれ二十分チほどで、高さは

五センチほどの紙箱だった。

蓋を開けると、中にほどこされたやがて四つ行儀良く並んでいた。

アイは緊張した面持ちでどりやきを一つ手に取った。そしてそれを半分に割ると、片方を食べ始めた。一口、また一口と、緩慢な動作でアイはどうやらを食べ続ける。

一つに割ったどりやきの片方を全て口に入れたといふと、アイの口の動きが止まった。

それと同時に、正座をしてこむアイの足の上に、水滴が一つ、また一つと落ちた。

「ボクの本体が、亜鉛合金製だつたらよかつたのに……なんてね」

寂しげに笑うアイの口から、嗚咽が漏れ出した。

「俊明さんと一緒に、ご飯や……お菓子を……」

食べたいよ、と言つたつもりだったが、最後の方は涙声で言葉にならなかつた。

そのままアイは、両手で顔を覆い泣きじやくつた。

アイは、食べ物の色や形、料理の作り方や盛り付け方を画像として認識し、記憶し、再現する」とに長けている。それはアイの本体がカメラである事と無関係ではない。

ただ、アイには味覚がない。これもアイの本体がカメラである事と、決して無関係ではなかつた。

ヒトの姿をしているので、モノを食べる事は出来る。

口の中で食べ物がどうなつていてるかを、感知する事も出来る。

しかし、その味を言葉で的確に表現する事だけは出来なかつた。

「俊明さん、ごめんね……ごめんね……」

折角の俊明からの土産を心行くまで楽しめない事を詫びながら、アイはちやぶ台の上に突つ伏し泣き続けた。

「ふ~っ、いい風呂だつた。あれ、アイ？」

居間に戻ってきた俊明が見たものは、食べかけのどりやきもそのま

まに、ちやぶ台に顔を伏せて眠るアイの姿だった。

「まったく、風邪引くべ?」

言つた後で（カメラの精神体も風邪をひくのかな?）と俊明は苦笑し、それでもアイの肩にタオルケットを掛けた。

ふと、食べかけのじいちゃんが田に留まつた。俊明はそれを一口で頬張つた。

ほんの少し塩味がするじいちゃんだった。

【終】